



JHDACによせて

「髪」という字は、長い友だちと書きます。
漢字が表すように、まさに髪を通して子どもたちの心を明るくする活動に、長く続く友情のようなものを感じました。
美容師の方々だからこそできる活動に感動し、素直に選ばせていただきました。
武田 双雲

01 | CITIZEN OF THE YEAR 2015

髪に悩む子どもたちへ ウィッグ提供の輪を広げる

ジャーダック
NPO法人 JHDAC (Japan Hair Donation & Charity) / 大阪府大阪市



人々が共鳴、共感し、強く心を動かされる良き市民活動を
私たちは、これからも応援してまいります。



シチズンホールディングス株式会社
代表取締役社長
戸倉 敏夫

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、1990年の創立60周年に際し、社名のCITIZEN(市民)にふさわしい記念事業をとの想いから創設されました。以来25年以上、「感動」を選考基準に、「良き市民の活動」を顕彰してきました。

今回受賞された皆様も、他者を理解し、思いやる優しさにあふれ、人々がともにより良く生きていくためにどうしたらよいかを考えて、ご自身にできることを着実に実践されています。それが共感の輪を広げ、周りの人々の意識をも変えていることは素晴らしく、顕彰させていただく私たちにとって喜びであり誇りであります。この「感動」のある社会にこそ、「希望」もあるのではないのでしょうか。

私たちはこれからも、「市民に愛され、市民に貢献する」企業理念のもと、市民社会の一員として、心打つ活動をたたえエールを送ってまいります。

シチズン・オブ・ザ・イヤーとは

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰しています。毎年、1～12月までに発行された主要日刊紙のなかから、賞にふさわしい記事を選び、主要新聞の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

2015年度 選考委員会

- 委員長 山根 基世 元NHKアナウンス室長
 - 委員 大坪 信剛 毎日新聞社 社会部長
 - 香山 リカ 精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授
 - 角田 克 朝日新聞社 社会部長
 - 益子 直美 スポーツコメンテーター
 - 三笠 博志 産経新聞社 社会部長
 - 八木谷 勝美 日本経済新聞社 社会部長
 - 山腰 高士 読売新聞社 社会部長
- 敬称略・五十音順
※役職は、2016年1月現在

Contents

3 NPO法人 JHDAC

髪に悩む子どもたちへ
ウィッグ提供の輪を広げる



7 山崎 充哲さん

多摩川の生態系を守りながら
命の大切さを伝え続ける



11 白石 祥和さん

子どもたちや若者に寄り添い
自立や就労支援に取り組む



15 対談

シチズン・オブ・ザ・イヤー
選考委員長 山根 基世さん & 2015年度受賞者
白石 祥和さん

18 歴代受賞者一覧

各受賞者へ贈る書



書道家
武田双雲

1975年熊本生まれ。東京理科大学卒業後、NTTに就職。約3年後に書道家として独立。NHK大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」、世界一のスパコン「京」など数々の題字を手掛ける。独自の世界観で、全国で個展や講演活動を行っている。メディア出演も多数。

ジャーダック
NPO法人 JHDAC Japan Hair Donation & Charity

想いの込められた髪が 笑顔を取り戻す きっかけに

「久しぶりに、本当の自分の笑顔を見た気がします！」
病気の治療で髪が抜け、つらい闘病生活を送ってきたその女子高校生は、ウィッグをつけた喜びを、そうメールに綴ってきました。それが、美容師として社会に貢献しようと活動を始めたJHDACの皆さんにとって、最初の提供者からの言葉でした。

髪への恩返し の想いも込めた 「ヘアドネーション」

2008年、大阪市北区にある築70年の古民家を改装し、渡辺

さんたち3人の美容師が共同で美容室「The Salon」を立ち上げたとき、お店の理念として自分たちらしい社会貢献をしようと決めました。「ただ髪を切ってお金をいただくだけでは、日本に美容



築70年の古民家を改装した「The Salon」

室が1軒増えるだけに過ぎません。髪を生業としてしている自分たちだからこその活動をしたと考えたのです」

同じ創立メンバーの万福さんも、「仕事をするだけではなく、社会に貢献することで、人はチャンスが取れると思うのです。ですから自分たちのためでもあったのです」と振り返ります。そこで注目したのが、アメリカで普及していた、がんの

治療や無毛症などで髪に悩みを持つ子どもたちにウィッグを贈る「ヘアドネーション」という活動でした。

とする子どもたちをつなぐNPO法人「Japan Hair Donation & Charity（通称：JHDAC）」を設立しました。

大切に手入れしてきた髪も、切られた瞬間にゴミになってしまいます。美容師である渡辺さんや万福さんたちは、そんな髪への恩返しへの気持ちも込め「ヘアドネーション」を始めようと考えたのです。翌2009年、本格的に活動に取り組みするため、髪を贈りたい人（ドナー）とウィッグを必要



人毛ウィッグは自然さが違うと声をそろえる、延岡さん、万福さん、渡辺さん（左から）



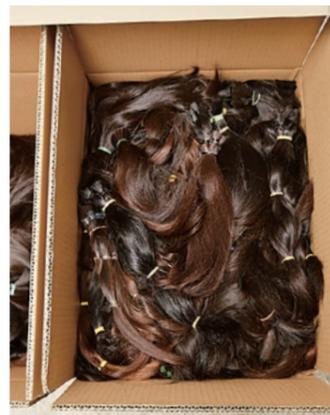
一人分のウィッグには31センチ以上の髪が20〜30人分必要



ウィッグをつくるための頭の採寸には、ラップとセロハンテープを用いる



技術を要するウィッグのカットだが、延岡さんは「私はご希望に沿ってお切りしているだけです」と自然体だ



毎日贈られてくるドナーからの髪の束

髪に悩む子どもたちが、 笑顔を取り戻すささやかな力に

ウィッグの提供で 伝わってきた、 子どもたちの心

こうしてウィッグ提供の体制を整えたJHDACのもとへ、最初の申し込みが届きました。希望してきたのは、病気治療のため髪が抜けてしまった女子高校生でした。つらい闘病生活に耐え、やっと退院が決まり復学できること

になったとき、JHDACの存在を知ったとのことでした。電話やメールでやりとりを重ね、JHDACとして初めてのウィッグを提供することができました。ウィッグ提供後に届いたメールには、闘病中のつらかった想いととも、ウィッグが届いて好みの髪型にカットしてもらったとき、鏡を見ながら込み上げてきた「久しぶりに、本当の自分の笑顔

ドナーの想いも受け止めながら、贈られた髪を束ねていく渡辺さん

を見た気がします！」という喜びが綴られていました。家族や友達を心配させないための笑顔ではなく、本当の自分の笑顔を取り戻したという言葉が今も忘れられないと渡辺さんは言います。

JHDACがウィッグ提供の条件として「18歳以下」としている理由には、市販の人毛ウィッグは数十万円と高額なことに加えて、子ども用のサイズが非常に少ないことがあります。また18歳は、多くの子どもたちにとって制服を着て集団生活を送る最終年齢であり、まわりの目が気になる彼らにより自然な人毛ウィッグを提供したいという想いがあります。



ドナーや美容室からの問い合わせなども多い



SNSなどを通じてヘアドネーションの活動は急速に広がった



ウィッグに対応ができる美容師の育成が必要

理想は、

ウィッグの必要ない

社会が来ること



ウィッグ製作費を支えている募金箱

ドナーや全国の美容室が支えるウィッグの無償提供

人毛のウィッグ一つには、31センチ以上の髪が20〜30人分必要ですが、当初は週に1通ほどしか届きませんでした。それが、ヘアドネーションに協力した人がSNSや新聞の読者欄などに投稿するようになり、賛同美容室や個人から届く量が増えていきました。2012年から活動に参加してい

る美容師の延岡さんも「電車の中でヘアドネーションのために髪を切ったという会話を耳にすることもあり、活動の広がりを実感します」と話します。現在、賛同美容室は全国で800店を超え、1日に30〜50通もの髪が届くようになりました。ウィッグ一つに必要な製作費約10万円は、賛同美容室に置かれた募金箱の寄付金で賄われています。ドナーから届けられる時に一人ずつ分かれている髪も、ウィッ

グに使うための処理段階ではすべてが一緒になります。「ですから一つのウィッグには、数えきれない人の想いが凝縮されているんです」と渡辺さんは話します。

誰もができるヘアドネーションをハブとして支える

JHDACのウィッグは申し込みに提供され、現在まで1000人近くに届けられました。そのなかには、1年近く待ち、ウィッグを作るための採寸を受けた1週間後に亡くなった女の子もいました。「同世代の子に比べたら、できなかったことが山ほどあると思います。でもその子はお母さんと一緒にいた時間は誰よりも多かつたんじゃないかなと。そんなことを考えたりします」(渡辺さん)

ドナー、賛同美容室、ウィッグ製作会社、ウィッグ希望者、そうした人たちをつなぐ「ハブ」の役割を果たしながら広がりを見せるJHDACの活動。万福さんは、「そのなかで、私たちは本当に自分たちができることをしているだけなんです」と話します。延岡さ

んも、「私は贈りたいという人の髪をカットし、皆さんのおかげでできたウィッグをカットしているだけなんです」と話します。それでも、切り過ぎたら決して伸びてこないウィッグのカットやフィッティングは非常に難しく、現在対応できる美容師は国内に10人ほどしかいません。そのためJHDACのメンバーも、ウィッグを届けてカットをするため休日や遠方まで出張することがあります。渡辺さんは、個々の力に依存しない組織化と、ウィッグに対応できる美容師育成の必要性を考えています。

JHDACには、「私の髪がどれだけ使えるか分かりませんが、少しでも役に立てばうれいです」と添えられたドナーからの手紙や、「どんなに感謝の気持ちも伝えても足りないくらいです」といったウィッグを提供された子どもたちからのお礼がたくさん届いています。そんな声を受けながら、JHDACの皆さんは「髪がないことに偏見を持たれず、ウィッグが必要のない世の中が来ること、少しでも貢献できれば」と、未来を見つめ活動を続けています。

ドナーの願いが込められたメッセージ



山崎 充哲さんによせて

「川」という偉大な存在は、人類に大きな恵みをもたらしてきました。しかし、あまりにも身近なため、現代人はその有り難さを忘れがちです。川が育む「魚」に着目し、自然な生態系を取り戻すため続けられている活動の素晴らしさに想いを馳せ、書をお贈りします。

武田 双雲

02 | CITIZEN OF THE YEAR 2015

多摩川の生態系を守りながら命の大切さを伝え続ける



山崎 充哲さん / やまさき みつあき 1959(昭和34)年生まれ。神奈川県川崎市在住

山崎 充哲 さん 命のリレーで 多摩川を未来へとつなぐ



山崎さんは、ライフジャケットを着ることを基本に、子どもたちが水辺を安全に楽しむための大切な約束を伝えながら、活動を続けている

「外来種は本来日本の川にはいけないものです。でも、その命を粗末にしていけないわけではありません」
多摩川の生態系を守る活動に取り組みながら、山崎充哲さんは子どもたちに自然や命の大切さを伝えています。
無駄な命なんて一つもありはしない。そんな想いを込めた「命のリレー」が、今日も続けられています。

子どもの涙が
きっかけで生まれた
「おさかなポスト」

山梨県に水源を發し、下流域では東京都と神奈川県の間境となつている一級河川、多摩川。その川沿い、川崎市多摩区の稲田公園内にある生けすに、「おさかなポスト」という名前の水槽があります。「さまざまな理由で、熱帯魚や金魚、カメなどを飼えなくなった人が、なんとか命を助けた」と持ち込み、ここで預かっています。

地元生まれ育ち、子どものころから多摩川を見続けてきた自然環境コンサルタント、山崎充哲さんが「おさかなポスト」を設置したのは2005年のこと。多摩川の調査で川沿いを歩いていたら、金魚の入ったビニール袋を持って泣いている男の子に出会いました。聞けば、お母さんから川に捨てて来るように言われたと言います。「それなら、稲田公園の生けすに預かってあげるよ」。見かねた山崎さんが、自ら組合員である川崎河川漁業協同組合が管理する生けすに入れてあげる



「おさかなポスト」に預けられた魚やカメを見る山崎さんのまなざしは、常にあたたかい



「おさかなポスト」には、毎日のように多くの人が魚を預けに訪れる



かつて「死の川」とまで言われた多摩川には、現在、春に数百万匹のアユが遡上する

清流に戻った多摩川で、 生態系の保護に挑む

と、男の子は喜んで帰っていきま
した。
ところが、その子が友だちに
話したのでしようか。それから1
カ月の間に300匹もの金魚や
熱帯魚が生けすに集まったので
す。「そうか、みんな困っていたん
だ」。こうして、山崎さんは生け
すに「おさかなポスト」と名前を
付け、飼えなくなった魚を引き取
る活動を始めました。

外来種が 越冬できるようになった 「タマゾン川」

「おさかなポスト」は、飼えなく
なった魚やカメを引き取ることで、
多摩川に外来種が放流されるの
を防ぎ、生態系を守る重要な役
割を果たしています。
昭和40年代に「死の川」とまで
言われ汚染されていた多摩川は、

現在は春に数百万匹ものアユが
遡上するきれいな川に戻りまし
た。「これは、流域の皆さんの地道
な努力と、経済的な負担によるも
のです」と山崎さんは話します。
流域の人々は水道料金に加え、そ
れより高い場合の多い下水道料
金を毎月負担し、下水処理場の
整備を支えたのです。「自分の家
が川とつながっていることを皆が
意識したことで、多摩川は生き返
ることができました」

しかし、その一方で深刻になっ
てきたのが、観賞魚などの放流
による外来種の急増でした。し
かも、下水処理場には家庭から
お風呂や台所のお湯が集まる上
に、汚れを除去する際にも水温
が上がるため、その水が流れ込む
多摩川の温度が上昇し、熱帯の
外来種が越冬できるようになっ
たのです。「タマ
川」ならぬ「タマ
ゾン川」です。山
崎さんが調べて
みると、シルバー
アロワナ、ピラニ
ア、アリゲーター
ガーバイクなど、
本来多摩川にい



事務所を兼ねる山崎さんの自宅でも預けられた魚を保護している

つないだ命が、 全国の学校で 自然環境教育に活躍

山崎さんは、外来種の放流を
防ぐ活動のため、「おさかなポス
トの会」というNPO法人もつく
りました。活動は次第に知られ
るようになり、設置から10年で持
ち込まれた魚の数は優に10万匹
を超えています。活動は、ボラン
ティアや老人クラブの皆さんの協
力も得ていますが、エサ代、電気
代など毎月50万円ほどの費用は
自らの負担です。

地道な努力により、稲田公園
周辺の水域では外来種がかなり

少なくなりましたが、山崎さんは決して外来種の駆除をしているわけではありません。ポストに持ち込まれた魚は「預かった命」であり、新しい飼い主に引き取ってもらうことで「命のリレー」が続けられているのです。小学校だけでも全国約300校が協力し、ほかにも個人や学校、高齢者施設、児童養護施設、水族館などが魚を引き取り、命のリレーが行われています。

山崎さんは、子どもたちにこんな話をします。「飼っていた金魚が死んでもゴミとして捨てないでください。花壇の隅に埋めて花の種をまけば、埋めた金魚の栄養をもらって花が咲き、また新しい種ができて命のリレーができます」と。

出前授業などで小学校に行つたときも、必ず給食と一緒に食べ、話をします。「みんなのお椀に入っている豚肉は、豚さんが殺されて、多くの人の手を経てここに来ています。私たち人間はその命をいただいて生きています。もし給食を残したら豚さんの命がムダになってしまいます。大事に食べようね。その日は給食がきれいになるそうです。」

多摩川を 「良い子を育てる 良い場所」に



「多摩川春のあゆ祭り」では、「大きな〜れ」の掛け声とともに子どもたちが一斉にアユを放流



多摩川で釣りをする幼いころの山崎さん

自然や生き物は もちろん、子どもたちの 命を守るために

幼いころ両親に連れられて多摩川に遊びに行き、一人でできるようになってからは、子どもの足で20分かかる坂道を毎日のように上り下りして通った山崎さん。「自然の素晴らしさ、命の大切さを教えてくれた多摩川は、いつまでもその自然や命の大切さを理解し、次の世代へ伝えていくことのできる良い子を育てる良い場所であつてほしい」と想いを込めます。

このため、「おさかなポスト」の活動に加え、子どもたちを対象にした出前授業、移動水族館、流域のゴミ拾い、水辺の安全教室などにも力を入れています。また、多くの仲間や家族の協力を得て、稚アユを集めて放流する「多摩川春のあゆ祭り」や、ライフジャケット



「やまちゃん」と暮れる山崎さんの周りには、いつも子どもたちが集まってくる

今も、200種類以上の外来種が生息する多摩川。山崎さんは、「皆さんが、責任を持つて最後まで生き物を飼うことの意味や、自然を守るために何が重要かについて理解が深まっていけば、「おさかなポスト」もやがて要らなくなるでしょう。そんな日が来るまで、これからもこの大切な命のリレーを続けていきます」と熱く語ります。



移動水族館では実際に魚に触れて「命」を体感する



白石 祥和さんによせて

不登校の子どもたちは、たまたま環境に合わなかっただけで、決して弱いわけではありません。「君ならできる」。そのことを、自立支援を通して伝えているメッセンジャーとしての活動に感動しました。まさに子どもたちの【祥】(さいわい。めでたいこと)を信じていると感じました。

武田 双雲

03 | CITIZEN OF THE YEAR 2015

子どもたちや若者に寄り添い 自立や就労支援に取り組む

白石 祥和さん / しらいし よしかず 1981(昭和56)年生まれ。山形県米沢市在住



白石 祥和 さん

失敗してもいい。 ともに一歩踏み出そう

「とことん向き合えば、子どもは変わるんだ!」
小学校の臨時教員として特別支援の必要な子どもを担当した白石さんは、休日もその子に寄り添い、同じ目線で向き合ううち、心を開き態度が落ち着いていくのを感じていました。
この心の交流が、次第にフリースクール構想へとつながっていったのです。

「With優」には、あなたと一緒に、
優しい人を育て、自分たちも優しい人を
目指すという思いが込められている



困難を抱える 子どもとの出会いから 支援の道へ

山形大学教育学部に学んだ白石祥和さんは、卒業後は生まれ育った米沢市で命に向き合える仕事をしたいと、消防士を目指しました。結果はまさかの2年連続不合格。失意のなか北海道

の牧場に仕事を見つけ米沢を後にしました。

北海道でひと冬を過ごした白石さんに、米沢市の教育委員会から1本の電話が入ります。「小学校の臨時教員をしないか」。これが転機になりました。

帰郷した白石さんが担当したのは、一人の特別支援の必要な小学生。思うように指導ができず、他の先生の目も気になる日々が続くうち、「とことんこの子と向き合ってみよう」と、自分が子どものころ楽しかった山や川に誘われました。「あるとき山へ栗拾いに行き、川原で焼いて一緒に食べていると、今までにない笑顔を見せたのです。こんなふうには子どもは変わらないだと思いました」。その子は次第に教室でも態度が落ち着くようになり、協調性も出て、周りからも認められるようになりました。

その後、教師をするにはあまりにも経験が少なく感じた白石さんは、まず自分の目で見た世界を自分の言葉で伝えようと、臨時教員を辞してフィリピンに渡り、ストリートチルドレンの支援活動に参加しました。現地の子どもたち

の力強さや輝く笑顔を見ながら、「教育の形はもっと自由がいい」と実感して帰国。困難を抱える子どもたちを支援するため、チラシに想いを綴って市内7000軒を訪問し、11人の賛同者を得ました。そして、2007年5月、NPO法人「With優」を立ち上げフリースクールを開設したのです。



小学校の臨時教員として子どもと向き合ったときは、休日ともに過ごし信頼関係を築いた



フリースクールでは一人ひとりの目標や進度に合わせて、きめ細かな学習指導が行われる

居場所がない子どもたちにも 学びと生活の場を

学習以外の経験も 積み重ね自立心を育む

学校に行けない子ども、または行かないことを選択した子どもたちのため、たった一人の生徒からスタートしたフリースクール。やがて口コミで生徒が増え、半年で5人になりました。「自分の生活もありましたので、朝と夜は魚市場などで働きながらでしたが、そんな姿を見せることも教育になると考えました」

授業は教員資格を持ったスタッフがマンツーマンで行い、家から出られない子どもたちの所へは白石さんが中心に自宅訪問を行っています。「毎日開校してしているフリースクールは県内でここ『With優』だけなので、生徒は県全域から来ています」



これまで約50人がフリースクールから巣立って行った

を除き週末には生徒が調理や接客をするカフェレストランになります。教育相談の窓口になるとともに、生徒が人と接するトレーニングになるからです。また、毎年実施している修学旅行の費用も、生徒が採った山菜などを支援者らに購入してもらい賄っています。これまで約50名が学び、現在の生徒は小学生から20歳くらいま

生徒たちには、自ら学ぶ力を身につけてほしいと話す白石さん。「これまで出会った生徒たちがいたから、今の自分があります」と話す

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長

山根 基世さん

対談

2015年度受賞者

白石 祥和さん

ともに悩み、支え、道を切り開く その熱意が若者を勇気づける



Motoyo Yamane

NHKアナウンサーとして数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンス室長に就任。NHK退職後、子どもの言葉を育てる活動に取り組んでいる

Yoshikazu Shiraishi

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長の山根基世さんが、2015年度受賞者の白石祥和さんを山形県米沢市に訪ね、白石さんが就労支援を行う居酒屋「結」にて、困難を抱えた若い世代を支える活動の原点や、家族、故郷への想いをお聞きしました。

家族の絆のなかで 学んだ自分の役割

山根 白石さんが、小学校で特別支援の必要な子どもを担当したとき、何かを教えるというよりも、自分が子どものころに楽しかった経験をさせて、その子が次第に心を開いていったという話がとても印象的でした。

白石 私の家は、祖父母と両親と妹2人の7人家族だったのですが、両親とも忙しいなかで旅行に連れて行ってくれたり、パーベキューをしてくれたのがすごくうれしかったです。それで、子どもたちと関わるときも、同じ経験を共有したいという気持ちがあるのだと思います。

山根 相手が子どもでも、お互いの心が通い合えば心を開きますものね。白石さんご自身が子どものころはどんな家庭だったのですか。

白石 両親からは、玄関の掃除とか兄弟それぞれに仕事を与えられていて、終わると必ず「ありがとう」と声を掛けてくれるので、いつもやっつよかつ



就労支援では、名刺交換のマナーなど、仕事に就いてから必ず必要になる実践トレーニングも大切だ

学びの場はつくりましたが、次に直面したのが就労の問題でした。「学校段階でつまっていた子が社会に出て、再び壁にぶつかってひきこもりになってしまうことが多いため、就労支援の必要性を痛感したのです」。こうして2010年に開設したのが「置賜若者サポートステーション」です。

互いに触れ合った時間が
これから生きる財産に

で約20名。勉強だけでなく、ボランティア活動や地域のイベントに参加するのも特徴です。「何かに一生懸命取り組んだ経験の少ない子どもが多いので、人と交流したり、初めての活動に挑戦するところが大きな財産になるのです」と白石さんは熱く語ります。



居酒屋「結」は、本音で話せる就職相談の場にもなる

「失敗したら戻っておいで」と、笑顔で送り出す



接客を通じて、地域の人ともつながる

ここでは専門の相談員が相談に乗り、一緒に支援プログラムを考えながら就労を支援しており、これまで約600人が登録し、現在は約200人がサポートを受けています。「働く意思はありながらもうまくいかず、心身のバランスを崩して入院した若者を、病院からの紹介で支援するケースも増えています」

失敗を恐れずに実践的な仕事のトレーニングができ、就労相談にしやすい場所をつくりたいと考えた白石さんは、2013年に支援者から協力を得て会員制居酒屋「結」をオープンしました。「その時に関わっていた若者は居酒屋で将来働いてみたいと話していました

た。それ以前から、本音で聞けるのは一緒に飲んでいる時が多かったことと、活動を続けるにはある程度の収益が必要だということもありました」

会員制としたのは、この店が職業訓練の場であることをお客さんに理解してもらったためです。すでに会員は3200人を超え、笑顔と明るさをモットーに接客するうち、人間関係が希薄だった彼らとともに働く仲間という感情が芽生え、接客を通じて自信を取り戻し元気になる姿が多く見られるようになりました。

これまで20人以上がここで自信を得て巣立っていきました。彼らを送り出すとき、白石さんはいつも「失敗したら戻っておいで」と声を掛けます。「ようやく自分のやりたい仕事を見つけ、家族もひと安心していたのが、実際はうまくいっていないで、自分に価値がないと思ひ込む子もいました。すべての人にやり直しができる場所が必要なんです」。

「子どもや若者を地域で育て、将来、その子どもたちが地域社会



駄菓子屋を併設した寺子屋「あっあい」には、地域の子どものからお年寄りまで、世代を超えた触れ合いがある

これまで出会った子どもたちや若者がいるから、今の自分があると話す白石さん。「彼らに居場所や役割をつくる取り組みは、お互いに1日1日がかげがえのない時間。それをこれから生きていく上での財産にしてほしい」と、日々の活動に想いを込めます。

に参画することで地域を発展させていきたい」。そう考える白石さんは2015年に、世代を超えて地域の子どものからお年寄りまでが触れ合える場所として、駄菓子屋を併設した寺子屋も開設しました。放課後、地域の子どものちやフリースクールの生徒が勉強したり、お年寄りから昔の遊びを教わったりしており、今後はボランティアの学生にも参加してもらおう計画です。

CITIZEN OF THE YEAR 1990 - 2015

受賞者の皆さん

1990年の創設から市民に感動を与え、社会の発展に貢献した市民を顕彰してきたシチズン・オブ・ザ・イヤー。これまでの受賞者の皆さんとその活動をご紹介します。

2015年度	NPO法人 JHDAC	病気などで頭髪の悩みを抱える子どもたちにウィッグを無償で提供
	山崎 充哲さん	多摩川の生態系を守るため外来魚を預かる「おさかなポスト」を運用
	白石 祥和さん	不登校や引きこもりの若者たちに寄り添い、自立や就労支援に取り組む
2014年度	原田 燎太郎さん	過酷な生活を余儀なくされている中国の元ハンセン病患者を支援して10年
	本間 錦一さん	水難救助隊長として40年、海の安全を見守る87歳の現役ライフセーバー
	阪井 ひとみさん	社会的支援が必要な人たちが地域で暮らし自立できるよう、入居支援を続ける
2013年度	シチズン特別賞 高山 良二さん	地元住民たちとともに、カンボジアで地雷処理と復興支援を続ける元自衛官
	TOY工房どんぐり	障害児のためにオリジナルの布製おもちゃを作り続けて30年
	チャイルズエンジェル	子ども達の夢をかなえたいと募金活動に奔走し、動物園にキリンを寄贈
2012年度	上中別府 チエさん	高齢になってから夜間学校へ通い、勉学や課外活動に熱心に取り組む
	吉村 隆樹さん	障害者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供
	渡辺 玉枝さん	自然体の生き方で、2度のエベレスト女性最高齢登頂記録を達成
2011年度	ルダシングワ 真美さん	紛争から立ち直ろうとするルワンダで、義肢提供や就労支援に献身
	税所 篤快さん	バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む
	竹内 龍幸さん	盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける
2010年度	笹原 留似子さん	東日本大震災の被災地で、復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける

2010年度	吉田 守松さん	半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける
	吉岡 諒人さん	夏休みの観察・実験を通じ、「アジジコクは排泄しない」という通説を覆す
	樋口 強さん	がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年
2009年度	吉島 美樹子さん	ガン治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている
	多以良 泉己さん	リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている
	茂 幸雄さん	福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、バトロールと再出発支援を行う
2008年度	伊藤 和也さん(故人)	戦禍のアフガニスタンで緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる
	川崎個人タクシー協同組合	知的障害施設の子どもたちと行く「タクシードライブ遠足」を30年間継続
	出水市立荘中学校	ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀
2007年度	西谷 勲さん	中学の夜間学級に50年間仕送りを続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る
	車内清掃を続ける高校生 有志	JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い
	谷垣 雄三さん	西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる
2006年度	川越 恒豊さん	刑務所内で放送される人気番組のDJを、27年間で300回以上続ける
	桑山 利子さん	スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす
	有城 覚さん	交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園
2005年度	堀田 健一さん	障害者一人ひとりのニーズに合わせた自転車、手作りバドミントン続ける
	吉野 健治郎・勝 親子	親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける
	日本スピンドル製造株式会社 社員一同	JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施
2004年度	新宮山彦ぐるーぷ	20年にわたり大峯奥駈道(熊野古道)の南半分約45キロの整備を続ける
	兵庫県市町村職員年金者連盟豊岡支部 有志	水没していく観光バスの上で励まし合いながら全員が無事生還
	永井 利夫・サヨコご夫妻	子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた

2003年度	高松 由美子さん	長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援
	遠藤 マルシアアケミさん	お弁当の配達で緑で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校
	曾我 健太さん	ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘
2002年度	谷村 基さん	励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける
	武井 弥生さん	東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続
	アフガニスタン義肢装具支援の会	アフガニスタンの人々のために義肢を製作・進呈
2001年度	伊藤 明彦さん	全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録
	大島 誠人さん	自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見
	菅谷 昭さん	チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事
2000年度	近藤 原理・美佐子ご夫妻	障害者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた
	ジュンコアソシエーション	ベトナムの子どものための教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続
	福祉工房あいち	障害者一人ひとりの障害度に合わせて、補助器具を考案し、製作
1999年度	セイヤー・ミドリさん 与那嶺 政江さん	在日米軍の父と地元女性の間に生まれた子どものために、学校を開校
	トーマス・カンサさん	修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2,000台
	録音グループ「声」の皆さん	視覚障害者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年
1998年度	岸本 康弘さん	ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む
	金子 聡美さん 安田 志津さん	ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車日本列島を縦断
	「福祉ネットワーク池袋本町」の皆さん	電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る
1997年度	葛木 みどりさん	南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現
	高澤 圭介・ナミ子ご夫妻	私財を投じてお年寄りや障害者が気軽に立ち寄れる家を完成
	愛知県立東山工業高等学校 車いす部	高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈

1996年度	小山 道夫さん	ベトナムの子どものため、職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設
	福岡 明夫さん	自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録
	古川 ヨシさん	障害者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師
1995年度	川田 龍平さん	命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身
	木村 三男さん	濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出
	神戸商船大学「白鷗寮」自治会	阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出動
1994年度	星野 勇・シズエご夫妻	足の不自由な方のために1,000足を越える靴を無償で修理・改良
	山下 秀治さん	知的障害者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築
	森本 春子さん	山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける
1993年度	宇佐美 松恵さん	1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る
	佐藤 昭夫さん	パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年
	8/6 竜ヶ水駅災害救助活動グループ	土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助
1992年度	清水 ルイーズさん	日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている
	干川 文次さん	絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元
	「雄冬新聞」歴代編集長	地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー
1991年度	チョン・キューキョンさん	長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ
	馬場 国敏さん	湾岸戦争で原油汚染にあぐら野鳥を救うため、国を動かし現地で活動
	十円会	月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献
1990年度	加藤 幸男さん	バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助
	鈴木 陽子さん	過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動
	林 鎌友さん	使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付



CITIZEN



NPO法人 JHDAC

髪に悩む子どもたちへ
ウィッグ提供の
輪を広げる



山崎充哲さん

多摩川の生態系を守りながら
命の大切さを
伝え続ける



白石祥和さん

子どもたちや若者に寄り添い
自立や就労支援に
取り組む



シチズンホールディングス株式会社

〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12

TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280

<http://www.citizen.co.jp/coy/index.html>